

「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成 26 年 (2014 年) 月 日

ふりがな 氏名 石崎 幸子	生年月日・年齢 [REDACTED]
※ 氏名の公開の可否 (可・否)	[REDACTED]
現住所・連絡先 [REDACTED]	
電話 [REDACTED]	FAX [REDACTED]

(聞き取り代筆した方の連絡先)

ふりがな 氏名	電話 () -
※ 氏名の公開の可否 (可・否)	FAX () -

※ 上記に記載された個人情報取り扱いの取扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

母は
貴が上で
経戦の
おくる年に
是くお別れ
た

(被爆当時の状況)学校はオエがわつていたことはおぼろげです。

当時の年齢	中学 2 年生 15 歳	性別	男 <input type="checkbox"/> 女 <input checked="" type="checkbox"/>
当時の職業・学年等 (できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい) ① 中学 2 年生でした。学従どう員で急遽入行していきわたったのは は 母の体身合が異く二人の妹たちが遠くまで母の代り休めましょ 当時(5分)爆心地から3分、水子の又、南麓意地 家の中に居たおぼ ガラスの割れを、着ていたものの上から体たせりあまのさわと痛まいた 遺棄した。			

② 爆弾が
落ちた時
は、母妹
等は
部屋に
いたので
ガラスは
おぼろけ
に落ちた

親を
第 2 中
國民学校
まどろ
いたらい
なさい。

※ 被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際に、公開します。

※ この応募用紙に、被爆体験談(様式不問)を添付してください。

※ 提出された書類は返却いたしません。

② 家の中は爆風でガラスも水屋は、水屋のふみおぼろけに落ちた。
 けれど私の体たのまどろけを、ガラスを取ると、おぼろけに落ちた。おぼろけと
 痛いの直ぐに、私も妹と同じ様に声をあげて泣きました。二度と戦争は
 いやです

①

中学二年生だ。私には、長く、父の勤行で出て
いっただけ。此の日は、たゞか幼ない父の妹たちが
泣いて私や母にしがみついている。母は
体具合が悪くあまりにも妹達を泣くので母は私に
悪いけれど私に体具合が悪く泣いて休んで妹達を
見てほしいと私にためめいめんねとねとども言。私
も父の妹達の泣く姿を見ると穴りまて出る事
が素直な。父は早くに出勤して、たかいて仕
なく私は休んだのです。母の手伝いをまかせ、産
すわらうとしてたんの気なしに時計も見たら、
だ。と同時に此の世のものともおもう。父が
家の中にさしこんだ。と同時にかラス窓のガラスが
粉々に飛びちり私の体。かすま、と窓にさしこん
足めがみ場がたつた。その時は妹達はあまりにも
泣くので母に連れ来られ奥の部屋にたかいて父は

②

ささらなが、火を盆々の物が飛びたり此の世のものはおもえな、ほど怒りしかつた。ガラス窓の処に、私
の体には割れだ、ガラスがささり、痛いのと、ホンのか
~~い~~一緒になり、声もあげて泣いた。すめる処
無いほど、ガラスの割れだ、が、タタミにひかきさ
自分の体にも窓側にむいて、大茶間に置く処に
ガラスがささる、痛いのとおそろしさと
血の流木とが一緒になり、鉄釘と同様の様に私
をあげて泣いた。母も泣き泣き、ガラスを
取ってくれた。あまりの恐しさに、水より
こわかった。家の中は天井はた水さかり、
押入の中の物は畳の上へ飛び出し、水屋の中
の物はたれの上へ落ち、庭のかみ場ははか
た、私と母とは泣き泣き、割れた食器や
たれ下さる、電灯の光をあげ、少しでも

③

雇われる場所を二つしらえた。あつりの敷いかに
二名妹達は泣きまわら。私は自分の体にもど
きさ。トカラスを取るので一生涯命だ。
母はお愛そうにいいながら泣き泣きから又
を取ってくれた。着るにたもめがらすに衣者
ので大変だ。た。私も着るあげて泣きたか。ト
が妹達と同じ様ではとガマニもした。
と水位に時間が過ぎたか知らずかトが父が
会社から帰つて来た。お遊り母を責めた父は
安心したのが男泣きした。私の体のあちこち
からまた出血していた気があり、父はお愛想に
となんと母云いながら血をかきとてんれえい
と水位に時間が過ぎたか知らずかトが
家の前は急いで道踏だ。たかして男の人と女の人
達がひきさが水位に成る水服を着るにまは

④

顔又顔也体から血~~が~~が流れていても足も
ひこずりながら少しは少しとあるにて川下川の
方へあるにてはかれば 若にお母さんが赤い血を
持た。こして足もひこずりながら盛さんと同じ
様にあるにいた。母は「それでその人に毒をかけ
た」赤い血のおしめがあるからもつて血がたいて
まじりに持ってきてあげるからと赤い血を「だ」に
して、その人に毒をかけた。家の前の広道
にそのころと男の人と女の人とかがあつたが
足もひこずりながら「川下川の」の方へと
あるにてはかれていた。家の前の広道の向う
側倒に大きな水たまりがあつた。此へ男の人が
顔をつけた時、顔をあげる事が出来なかつた。
子供心に「あつてあげる事も出来ず」にから
た。「川下川」をどこからこら水たまりが分ら

⑤

たにが男の人と女の人達が着ては衣服が又これ
たままがうたにあらざげ胸身も必らまげれ
足をひきずりそろそろと日が落ちてても
足音がのこりもつづいていた。
家のまわりの庭に「ボウウ」の音も作つて
その夜は元の中でおぼろしく原爆の音が
後で知ることだが我が家にも「三十五」の
場所と後から知りました。
十週のおぼろしく書いたものですが無署名の
書いた作文読みに「いい」と思いますが文学者が
書いたもので「免れさ」

石崎幸子

「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成 26 年 (2014 年) 月 日

ふりがな 氏名 板谷 律三 いた ぎん りつ さん	生年月日・年齢 [REDACTED]
※ 氏名の公開の可否 (可・否) (可)	[REDACTED]
現住所・連絡先 [REDACTED]	[REDACTED]
電話 [REDACTED]	FAX [REDACTED]

(聞き取り代筆した方の連絡先)

ふりがな 氏名	電話 ()
※ 氏名の公開の可否 (可・否)	FAX ()

※ 上記に記載された個人情報を取り扱いは、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

(被爆当時の状況)

当時の年齢	17 歳	性別	男・女
当時の職業・学年等 (できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい) 消防士 西条第一小学出張所 実家の井戸に降りて被爆したのが半命			

- ※ 被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際に、公開します。
- ※ この応募用紙に、被爆体験談(様式不問)を添付してください。
- ※ 提出された書類は返却いたしません。

私の被爆体験談と平和への思い

山形県寒野市

山形県原爆被害者団体協議会

会長

伊藤宣夫

八十六歳

昭和六年九月十八日満洲事変が勃発し、次いで昭和十二年七月七日
芦溝橋事件で日中両軍の武力衝突から端を発し、それが支那事変
に発展し、中国全土に日本軍が出兵し、遂に昭和十六年十二月八日未明、米、
英、蘭三國に對し、宣戦布告を発し、太平洋戦争(大東亜戦争)となり、
南方諸島で激戦が展開された。昭和十八年二月がたつた島からつり
の戦に依り撤退せざるを得なくなり、全軍撤退し、北方ではアッツ島守
備隊が玉砕し、又南方諸島各地で玉砕が報せられ頼みとするが、この島

No.1

守備隊も不敵し、住民も断崖から海中へ飛び込み命を落し、よく
本土決戦が日本全国に叫ばれ昭和三年三月東京、大阪大空襲と
全日本本土の都市は空襲で焦土化し、津浦も激戦の結果、米
海兵隊水上陸し、八月六日午前八時十五分広島へ原子爆弾が投下
され、以後名古屋長崎にも原子爆弾が投下炸裂し、人間も草木も総
て熱線と爆風に依り焼死焦土化し、同日空軍果敢堂に中二機艦砲
射撃を受け、製鉄所や市街中央部は全滅し尊い犠牲者も八百人
以上出たのである。

戦争は延々と十五年間を戦い、三百三万人以上の尊い命も犠牲にし、
八月十五日正午玉音放送を以て日本軍無条件降伏となり終戦と
なる。

102

私も昭和三年二月当空軍果敢堂五遠野中学校五年生卒業を目前に
し、十七歳にして祖國日本を死守する覚悟で陸軍船舶特別幹部

候補生(三期生)を志願し、香川県小豆島の本隊に入隊したが、二月十六日
頃、小豆島(二六七一)部隊(陸軍船舶通信補充隊)へ転属し、六月六日、
島前宇治港の船舶司令部地内に実戦訓練の為、派遣中、岸壁付近に
於て熱線を浴び被爆した。

その時の状況は、午前八時前、空襲警報が鳴り、郷音も全市民は防空壕
に避難した。間もなくB29三機が、金属音も轉かせながら一万米以上の高
度で、小豆島上空に飛来し、何事もなく去る行く感じだったので解除し、警
戒警報に切り換えたので市民も安堵の胸を撫で下し、「しゃくしゃく」と壕
から出て各自の目的地へ向う歩行中、地上約六百米位で激しい爆発音
と共に閃光に依る熱線を放ち、爆風で家屋が物凄く勢いで土塵い
噴煙を捲き上げて倒壊した。その時の瞬間、市民の激しい雄叫びが
天地を揺らし、二十万人以上の尊い命が鬼神も近く野路に消えてし
まい、家屋は三日三晩燃え尽くし焦土と化してしまつたのである。

143

私はその時船舶司令部へ電文を片手に小走りに配達中であつた一瞬
慌てたが側にあつた防空壕へ飛び込み、壕は崩壊すると思つたが
瞬間の傷もせず難を免れたが壕から外へ出ると今迄紺碧の空は
忽ち埃塵や爆煙、そしてガス等によつて太陽を覆ひ薄暗くならせられた。
其の後直ちに船舶司令部へ大急ぎで走り行き、負傷して一将校に電文を
渡したが全員がその破片が顔面に突き刺さり、血だらけになり左
往して居た。そして急いで防空壕で勤務している班長の下に歸つた。
其後司令部からトコロ敷百が救援の急ぎ行つたが間もなく付近から
全身大傷をした市民が太勢運ばり来たが全員素足で衣服はボロボロ
口と手切水、手を前に垂れ下げて「兵隊を助けて」「或は水下さい」と微
かな声で「ロくろく」とやって来たので「おは大急ぎにおりに被服庫が
ら軍布も手当りな物数枚を一つ抱き出し、一果敢命運が海岸の側に数
米もある掘立て小屋へ横臥させ「預言」して「救援」が出来なかつた。

16.4

その中に上空は益々暗くなって来たが、「ア」と俄雨が降り来たがしかし、
左を左から次々と来る急流と一たび其を介護する為、がぶ濡れになりな
がら無我夢中で毛布を運んだ。

暫く経て雨が止んだ。その時青空の一角に真白の巨大な雲がひら
りと緩やかに活動しながら舞い上りつゝある。そして百歩位まで上昇
し、横は巨大なキノコの形をした雲となり、仰ぐ消える事なく中天
で動きながら舞い上り居た。後程二羽が原子雲であり、又先程
降る雨は放射能を含んだ所謂原子雲発生直前の「黒い雨」であった。
午後三時過ぎになって、太陽も雲で綺麗に隠れてたキノコ状の原子雲
も漸く崩壊し始め時間が経てると自然に消えてしまつたのである。

No.5

此の雲は常に動いて居たのも、けりとも見えた。
私達は先んずか条件の中で活動として居たはならぬとして巨大な雲が直列
に「ヨキ」に浮かぶので活動しながらも長く観察出来たものであります。

又先程の雨が止む直前の頃、市内の四方から火災が発生し、
午後には黒煙が太陽を覆い、大島全市街は火柱の塵となり巨大な
火柱となす天をも焦らす勢いで燃え上ったのである。

其の夜の某時、船舶司令官より、命令で大島駅裏側の三葉山に
予二総軍が避難して居るこの事、全然連絡なし。直ちに突撃隊を徴収
して現地へ移動し、状況と連絡を取りし、この事が班長より伝達された。

そこで五名候補生は防空壕に設置して居る送受信機二架を徴
収し、その二名は班員、余中交替をしながら進み事にした。

先づ守口を午後八時近しく思われる迄出発した。

電車大通りには足の踏み場もなす電線が散乱し、電車が転倒し

NO.6

電柱は傾きかたや看板が散乱して居る、守口は敬言警察署や建物は倒
壊する事には難免^もなかつた。進むに足、異相が真に入る。やがて火中に入らねば
ならない。下火とは言へ、市内は未だ燃え尽き、街路には真黒く

なった焼死体が道路を塞ぎ、火の勢が激しく、櫛笥水、目も持たなくなる様な状
 体である。三層とも文句も出さず、自ら燃焼の果ては、空を抜く自身も
 衛き、建物は焼け落ち、五々の行く手も断絶し、進むべき道を行き度
 りつながら先へ駈ける方向に歩み進み、足元から市内全域は、空気が倒壊
 して即死し、又這い出す事が出来ず、生きた建物の煙に巻かれて焼かされ
 に直面し、命も落した大勢の市民もあつたと思ふ。千田國良が表に起る
 し北谷山下の本陣に通じた五三期星の戦役には、この格なき事で死を
 戦死もあつた。[REDACTED] 君は水筒の水も水道より、飲ませられ、
 手を振る、後を振り返り、去つたところ、事ある彼が語つた、倒壊する時は
 市内は見渡す限りの火の海であった。その火の中からは、全死体或は半死体
 No.7 列種の木の葉で焼か、骨から出る青い燐が市内至る所から立
 ち上り、此の世の街は地獄である。と、感ぜざるを得なかつた。
 この時、市役所から班長殿、戦等は止むに及ばぬと、知らせられた。

「いかに本土決戦となつのに帝國軍人はそんな氣の弱い事では遺憾
と死らねば然し、この橋を罪も咎もない國民が、ただ一発の爆弾によつて、
破壊此の橋を残酷な死を遂げなければならぬのか？」

「戦争は集団的殺人だ。大虐殺だ。」

いかに世の中は軍命と平和を大がりに分け合はるぬと心の中で叫
び痛感せざるを得なからぬのである。

そして遂に広島県に近づく。駅前橋にたしかつた。今来た途中の御
幸橋や生治山橋、橋と云ふ橋は、超満員、大傷しと市民が足の踏み場
もない。金名期コリートの橋は、良き避難場所だ。たゞし。

私達が軍靴を叩いて歩くと、男の子が「大勢の」達が「兵隊
さん助さん」「水たまり」とか訴へ、取り巻かれたが遺憾共唯、頑張
る。この苦難を送る事だ、と残念ながら、此の時は何れ共ならぬ
か。た。

10.8

周囲一面炎々炎と燃え盛る。六島、

地獄の街と一瞬にして化けた六島。

戦禍に命をとりこし、今火中で焼かれる悪鬼、種々雑多の異鬼を
嘆きながら、やがてその事も直ぐ目前に六島隊が見え、漸く出向き、
一月以来の取は懐かしかった。然し無残にもその時の面影はなく、内部
は完全に燃え尽き、時々天井から焼けた木片が落下して火を散ら
して居た。裏を返り、目的地の三葉山へ遂に到着した。

班長が私達を整理させ、到着の報告をし、その後機庫の空気を軒先
で検閲した。移動歩を疲れもあつて直ぐ寝がらりと就いた。

恐らく原爆投下の八月六日の夜中地獄の街、六島も移動の途とな
え、真の地獄の街を歩き、見聞体験した人間は、立言 [REDACTED] 班長以下
六名の特別幹部候補生以外は、世界六島と云えなれど、

そして名々は翌八月七日より八月十日迄、三葉山山上より燃え尽きる市街を

109

NO.10

見下る一なから守品、陸軍船舶司令部と情報と通信とを以てする。
 市内は三日三晩焼え完全に焦土と化し、僅かに鉄筋コンクリートの建築物
 があつた。二層に木造と一層に建てる所のみであつた。
 十日には北谷山下の本隊も全滅して居るし、又千田國民学校の女中
 特報中隊も全滅の事だ。再び船舶司令部へ帰り任務は解除され
 隣接の船舶練習部へ移された。被爆被害者の介護の命令と受けて、以
 後毎日火傷の症瘡に油を塗らるゝの事だ。布巾が患部へ塗り、一日早く
 治癒を祈りながら手廻しし、又患部に蛆が徘徊して居るのを討つ
 る所、刺者、先鋒を細くして取つておいた。又一日は又から十支位の薪の薪
 自給を取り廻す。その死体も茶屋には一たかである。午前中は薪を焼く事
 午後には近所の倒壊した家屋の木材を担ぎ運ぶ。又日暮山に沈みかける頃
 炎が、市内は四方から家々を黒煙が帯状に立ち上り、一日も後ろかたけ
 赤く、燄も照らしたがる。それこそ母は母が深夜まで一睡もせず作

以上体験談は、余の戦争に無差別に人を殺し、人を苦しめ、苦しめ
りなく犯罪者たる、何の利もあらず。

わが日本は満洲事変以来戦争とし自國即ち外國、人をも何百人も
死に送らぬと、として現在毎年、人殺しに及ぶ指導者御するは、
絶好詩人たる此の氣持から、何人類を滅亡一事。

この世界全體は、命も尊厳も平和も豊かさを幸福も、人全に送る事です。
と、この精神を基本とし、お互に助け合い助け合うべきです。

今こそ全日本國民は過去にわたる列車の轍も踏み、十五年間の過酷な体
験風化を繰り返さず、戦争の被害者たる指導者、世界の先頭に
立ち、命令と平和の重要は、誰か指導者の立場に在り、全世界に平和を

19.12
平和を導くべき指導者たる、此の立場は、指導者たる、
核兵器の製造は、世界全體に、平和を破壊する、戦争の
被害者たる、平和の敵也。

以上